弥生から時を超えて

青谷上寺地遺跡

シリーズ 弥生人の生活を体験！

はしごは横向きに上る？

展示しているはしごを見られた来館者から、「こんなに急なはしごを上るのですか」と聞かれるたびに、「展示スペースのため急にしていますが、もう少し緩やかです」と答えています。

弥生人が本当にはしごとして使用していたかどうかは疑問も残りますが、実際の勾配は現在の脚立くらいで、高さと奥行きは10対4程度の勾配だと考えられます。それでも現在のはしごのような枠で組まれた構造でなく、段のある板といえる構造ですから、上り下りに不便です。

そこで、板に角材を打ち付けてはしご状にし、体験してみました。段の奥行きが約6㌢では、正面向きの場合、つま先が着く程度なので、手を板に添えなければ上れません。下りる場合も後ろ向きで手を添えなければ下りられません。まして荷物を持つとすれば、片手で持つか、背負ったり担いだりしなければ難しいでしょう。

ところが、横向きに上り下りしてみるとバランスさえとれば、はしごに手を添えなくても安全です。

出土した最長のはしごは2・7㍍。どんな使い方をしていたのか、一度体験してみてはどうでしょう。

横向きにはしごを上る

正面向きにはしごを上る

因幡万葉 夢幻譚

現代から万葉の世界へ旅をする私こと「万葉の旅人」が大伴家持と語り合う夢物語

巻七 雨乞いには何が効く？

六月、因幡では前の月から日照りが続き、稲を植えた田も、種をまいた畑も日一日としぼみ、枯れていく様子が見えてきた。

「実に困ったことになりましたね」と私が声をかければ、「見ると心が痛い。まるで赤子が乳を乞うように、天から恵みの水を仰ぎ待つことだ」と家持さんは、因幡山の窪みに見える白雲を恨めしそうに睨むのである。

「雨乞いでもやりますか」と私が言えば、「その昔、皇極天皇が飛鳥の河上で跪いて、四方を拝み祈ったら、忽ち五日間も雨が降り続いたということがあったが…」と家持さんは言いながら、土くれを取り出して何やら細工をし始める。家持さんは、プラス思考の人であった。

「何にお使いになるのですか」と私が問えば、「これは、水の神様の大好物なのだ。どこかの池に投げ入れておけば、神様のご機嫌も麗しく、雨を降らせてくれるかもしれぬ」と家持さんは、真顔で答えるのだった。

「現代でしたら、傘踊りを踊るのですが…」と私が呟くと、「傘とは、貴人にさしかけるもののことか」と家持さんが不思議がっているうちに、ゆっくり、墨を塗ったような雲が頭上に集まってきた。

「もしや」と言いかけた言葉をのんで、「これで秋の稔りは大丈夫だ」といった家持さんの顔は、やはり国守だった。続く…。

因幡山の松

因幡国守在原行平は、古今和歌集や百人一首に因幡山の松を詠んでいます。「立ち別れ　いなばの山の　峰に生ふる　まつとしきかば　今帰りこむ」（任地の因幡の国へ出立します。『因幡の松（往なばの待つ）』と言ってくれるなら、すぐにでもあなたのもとに帰ります）

（文＝因幡万葉歴史館主任学芸員　中山和之）

万葉クイズ

（先回の問題）
文中の挿頭は、現在の何のこと？
（解答）
髪飾り
（今月の問題）
文中の土くれで何を作っていた？
答えは8月1日号です。

©鈴木靖将